Japanese Association for Religious Studies

検証可能性・反証可能性に開かれていることである。だが、著者は終章において「神学的な主張、ないし仮説は、人間学の舞台に換言され、検証されるが、人間学の問いもまた神学において検証される」と言う。前半はともかく、後半は一体どういうことだろう。人間学の問いが神学において検証されるというのであれば、神学は「経験的な学」ということになる。しかし、神学がその本質において経験的な学ではないからこそ、まさに著者は人間学を基礎とする必要があったのではなかったのか。この奇妙な一文に、著者のいう「神学の仮説性」、そして「人間学を基礎とする神学」という企てそのものの危うい揺らぎを感じるのは、評者の単なる微視的な穿鑿だろうか。

以上、「言語」と「仮説性」という点で評者の拙いコメントを述べさせていただいたが、本書が、二〇世紀神学を体系的・包括的に論じる上で、今後繰り返し参照せざるをえない重要な一冊であることは間違いない。評者もまた、本書より多くの視座を学ぶことができた一人として、著者に深く敬意を表し、拙文を閉じたい。

寺戸淳子著『ルルド傷病者巡礼の世界』

知泉書館　二〇〇六年二月二八日刊
菊判　xiii＋五五六頁　六八〇〇円＋税

坂田正顕

本書は、著者が二〇〇三年十一月にまとめた博士論文を加筆修正して二〇〇六年度に刊行された五五六頁にもおよぶ大著である。日本ではルルド巡礼に関しては、これまで一部の断片的な紹介、巡礼記、同行医者によるエッセー翻訳書などに限られてきたが、本書は日本人研究者によるはじめての体系的かつ総合的な研究書であり、今後の巡礼研究にとっては言うに及ばず、関連諸分野においてもまた一般読者にとっても豊富な価値ある資料と数多くの問題視角を提供している基本文献となるであろう。また、すでに二〇〇六年度日仏会館主催の第二三回渋沢・クローデル賞を受賞していることからも推し量れるように、本書は単なる個別巡礼に関する事例研究の域をはるかに超える広がりを持った近年の巡礼研究における一大労作である。たとえば、その分析メスは、ルルド巡礼の成立とその発展に深く関わってきたフランス社会の政治・経済・文化的状況やフランス・カトリック宗教界の諸動向などにも広く及んでおり、いわば一味変わった近現代フランス社会の裏面史としても読める

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

ような内容となっている。しかし、評者にとってさらに重要であると思われるのは、本事例研究がルルド巡礼の個別的理解にのみ終わらずに、むしろ巡礼研究一般、あるいは比較巡礼研究に対してきわめて多くの示唆に富んだ諸事例や知見を少なからず内包している点にある。

たとえば、「われらが修行せしやうは、忍辱肉裟をば肩に掛け、また笈を負ひ　衣はいつとなくしほたれて　四国の辺路をぞ常に踏む」と梁塵秘抄にうたわれた日本的巡礼のひとつの祖型イメージがある。四国遍路に限らず、今もなおどこかに根深く底流しているかと思われる典型的な巡礼現象の心象のひとつである。こうした巡礼諸事例に慣れ親しんできた者にとって、本書で仔細に検討されるどこまでも組織的かつ「公的」でエネルギッシュな社会構築的営為としてあるルルド巡礼は、あたかも異種別次元に属する巡礼世界としてたち現れる。

本書を読み進めて行くほどにルルド巡礼のきわめて特異な個別性に印象づけられる。そのシンボル的主体である「傷病者」を核にして多様なエージェントが本巡礼世界に固有の「適切なルール」や「われわれ」を相互主体的に形成し共有してゆくその過程分析はあたかも一大絵巻物語を見るがごとくである。本書におけるキータームのひとつを借用するなら、本書自体が、ルルド傷病者巡礼のテキスト版「スペクタクル」の舞台になっているような錯覚すら覚える。しかし、その中に、「四国遍路」や数多の観音巡礼などは言うまでもなく、現代カトリック巡礼のもうひとつの代表的事例である「サンチャゴ・デ・コンポステーラの巡礼」世界が持っているような慣れ親しんだ巡礼諸要素は影を薄めて行くのである。であればこそ、むしろ逆説的に巡礼現象の本質やその豊潤な内実と多様性についての再検討をも迫る作品として読み手を刺激することになるのであろう。優れた事例研究は、理論の精緻化と一般化を促すといわれるが、本書はその好例である。以下、そのような視点から本書について若干俯瞰してみたい。

さて、本書の構成は、序論、一〜五の各章、そして結論からなる。序論では、先行研究のレビューと本論の位置づけ・狙い・方法論、そしてルルド巡礼の概況等についての簡単なオリエンテーションに当てられている。とりわけ重要であるのは、先行研究のひとつであるA・ダールバーグがルルド巡礼における「傷病者」の存在に着目しつつもこれを聖地における社会関係構築の過程（著者はE・ゴフマンやV・ターナーらの所論に依拠する）と関連付けなかったことに対して、この二テーマの関連を問うことが本論の基本的スタンスであることを提示している点である。本研究は一貫して社会構築論的アプローチを機軸にすえた研究である。他方、ターナリアン・モデルにはすでにいくつかの批判があるが、ルルド巡礼の場合、このモデルは複雑な位置を占めている。傷病者を中心としてそのときどきに構築された「われわれ」やわれわれの「適切なルール」の世界に焦点を合わせれば、たしかに本事例に比較的適合的な面が強い。とはいえ、同じルルド巡礼をターナーのコミュニタスモデルではなく、競合モデルとして描いたJ・イードの研究との摺り合わせが十分ではない嫌いがある。また、ターナリアン・モデルを理念型とみれば、現実の過程との距離を測る道具となる

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

が、その点の検証作業に関していえば、本書を通じて必ずしも厳密な意味での十分な検証は試みられていない。もっとも、本研究は比較巡礼研究ではなく個別巡礼の総合的記述が目的であることからすれば、巡礼の理論モデルに関して仔細な検討を回避したのは当然のことであろう。

さて、第一章「巡礼空間の構成」では、一九―二〇世紀のカトリック世界の動向（聖体やマリア神学など）、聖域（著者は、洞窟周辺、聖堂、行列の広場、その他に四分割）、旧市街地と周辺部などの成立と概要、あるいはこれら巡礼空間の変遷などについて仔細に分析されている。いずれも、ルルド巡礼の舞台装置として欠くことのできない基本諸要素の特徴が詳細に検討され、以後の分析のための前提条件が提示されている。なかでもルルド理解の要諦とされるのが「傷病者のスペクタクル」である。「ルルドの印象と体験は、このように、目に入ってくる傷病者の姿を核に形成されていくもの」であり、「……ルルドは、傷病者のスペクタクル、肉体の苦しみのスペクタクルの舞台なのである」とする著者の一貫した主張は、いうまでもなく本書のタイトルが単なる「ルルド巡礼の世界」ではないところに端的に表れている。ところで、ルルド巡礼におけるこのような傷病者存在の決定的重要性やそのスペクタクル空間性についての問題視角は、単なる巡礼者類型論や聖地空間構造論などに留まらない位相が含まれている。たとえば、対比的には四国遍路におけるいわゆる「カッタイ遍路（道）」などをめぐる諸言説の問題群が想起されよう。巡礼におけるネガティブ・エージェントの位置づけに関する問題がここには深く潜在している。

第二章「ルルド巡礼の歴史――傷病者巡礼の確立」は、タイトル通りのルルド巡礼の歴史を扱ったセクションであるが、これは単なる通史ではない。ここでは、前史、成立、発展・確立、そして第二次大戦以後の近年までのダイナミックなルルド巡礼の実証的な歴史過程が考察されるが、なかでも重要であるのは、この間に構築されてゆく巡礼当事者たちによるルルド巡礼の意味世界の発展史である。ルルド巡礼の発展は、一方では、ルルド単独の内在的発展としてよりも、時代環境コンテクストとの相互作用の坩堝の中に位置付けられている。「フランスの罪と罰」「フランスの救い」「病んだ社会の治癒」「記憶の共同体の再編」等々の問題意識のもとで、ルルド巡礼と傷病者巡礼が生成、発展、変容するそのプロセスが考察される。

他方、ルルド巡礼の発展は、巡礼行為をめぐる当事者たちの自己意識改革でもある。一八五八年見者ベルナデットによるマリア出現以降、四年後の聖域公認、引き続く宗教行列や巡礼団組織、そして傷病者参加や治癒事例など一連の出来事から、「私たちの傷病者」なる表現が登場し、さらには、御旗巡礼、司教区巡礼、傷病者巡礼としての全国巡礼確立などを経て、「〈苦しみの捧げもの〉と〈恩寵の流通圏としての〝われわれ〟〉」という初期の傷病者巡礼の意味づけ世界が考察される。（五章で詳述されるように、さらにこの巡礼観は再近年では「苦しみの捧げもの」から「苦しみを受け取る」論理へと変容しているという。）

たしかに一般に巡礼動機やきっかけに関する問題については重要な側面だが、当事者たちによる個別巡礼の意味づけを共有

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

しようとするこれほどまでに真摯な相互討議過程については、これまでの日本的巡礼においてはほとんど馴染みの無い世界である。その一因はそもそも基盤宗教教義における巡礼行の位置づけがまったく異なるからでもあろう。しかし、このような視角による巡礼社会の考察は、おそらくは現代巡礼一般においても今後重要性を増す予感がするのは評者だけであろうか。とりわけ先進国の現代の大規模巡礼の世界において、巡る者も巡られる者も急速にその表出的なメンタリティを変えつつあるように評者には思われるからである。

第三章「オスピタリテ」では、これまでのルルド巡礼の基本諸要素の知見を前提に、傷病者とならぶ重要な巡礼組織として傷病者を支援する奉仕者に分析の焦点が合わされる。著者は、しかし、一八八〇年創設譚を持つオスピタリテの活動を単なる巡礼支援団体としては見ていない。共和国の崩壊という事態にその原理と実践に対抗しつつ対処する運動として位置づけている。すなわち、それは、共和国の福祉事業政策に対抗すべく社会的カトリシズムが取った慈善活動としての性格を強く持ったものであった。典型的には、上流階級男性層がいわゆる「ノブレス・オブリージュ」の理念のもとに、十字軍やマルタ騎士修道会などの歴史的試みになぞらえて、カトリック男性のあるべき姿を求めて実践した組織的営為として展開されたとされる。さらに言えば、傷病者が苦痛を神にささげる貧しい労働者を象徴するなら、オスピタリエはその傷病者に肉体労働で仕える上流階級男性という自己イメージを持った活動であったともいう。両者間の犠牲と贈与の関係にこそオスピタリテの特徴があったというわけである。その過剰なまでの過酷な肉体的労働奉仕は、傷病者がルルド巡礼の主役であればこその奉仕文化であったようである（もっとも、このオスピタリテ活動は、近年「ノブレス・オブリージュ」規範から脱皮して「ディスポニーブル」規範＝即応性のルールを重要することにより、肩書きを持たず経済的主体でもない「私人」としての社会活動に変化しているという）。

なお、こうしたオスピタリテの活動が、同じ支援文化でも、たとえば四国遍路における伝統的な「お接待」習俗などとはいかに異質な原理に裏打ちされてきたものであるかがわかる。むろん、支援行為における内的エートスの深層に類似要素が見られないわけではないが、これを外的に規定する社会文化的諸条件や当事者たちの対応の仕方は大きく異なるものである。

ところで、オスピタリテが、当時のフランス社会における経済的関係に対する批判的側面を持っていたとするなら、第四章「奇蹟的治癒」は、ルルド巡礼世界による医療社会化・科学社会化に対する批判的側面にあたるものとして著者は位置づけている。もとより、ルルド巡礼の奇蹟的治癒に関しては、著者は本書冒頭でそのメカニズム等「癒しの聖地」イメージへの違和感を表明しており、また、「奇蹟のルルド」という先行イメージに反して、現在は、奇蹟について語りづらい雰囲気が支配的だともいう。本章で扱われるのは、ルルド巡礼の医師の役割と彼らが傷病者巡礼に持つ意義や近代社会の医療社会化批判としての奇蹟的治癒問題である。「治ることがどう理解されてきたか」を明らかにする点に焦点が合わされているからである。医

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

学審査局設置、治療物語から医学審査局による調査報告書へのスタイル変容や、カトリック医師の役割問題あるいはヒステリー問題など興味深い題材も尽きないが、ここでは、「適切な奇蹟的治癒」とは何かという当事者たちの解釈問題が重要となる。そして、与えられ受け入れられる恩寵、身体により恩寵が授受され流通していると確信することこそ奇蹟的治癒の核心だと著者は言う。ある点では「お大師様のおかげです」に呼応するかのような「恩寵の流通」が本書の鍵概念のひとつでもある。

他方、四国遍路その他の巡礼にも古より奇蹟・霊験譚は同様に付き物であるが、これらの霊験譚をめぐって医師が呼ばれて治癒判定を科学的に議論することなど思いもよらない話である。ルルド巡礼のきわだった特異な装置ではあるが、奇跡的治癒と神の恩寵をめぐる図式の中で医学審査局の役目は、科学的記述の中に回収不能な「断絶の原因」を語ること、原因の外来性を示唆することにあるとする見解は印象的である。近代科学を批判しつつも受容せざるを得ない西欧近代固有のアンビバレントな構造がここにはよく描かれている。

第五章「傷病者巡礼の展開」では、著者が参加した各種の巡礼調査記録をもとに、古典的な「苦しみの捧げもの」祭儀から「苦しみを被る」祭儀への転換や新しい「われわれ」の再構築が見られることを検証している。とりわけ、大戦後における傷病者の自立と参加をめぐる動向について検証するなかでは、捧げることを教える霊性から新しい霊性への模索の状況、言葉による参加としての「カルフール」の奨励、傷病者塗油の秘跡の再編成、英国障害者巡礼協会の巡礼や国際ポリオ巡礼、そしてルルド巡礼最先端ともいえる〈ルルド―癌―希望〉巡礼の諸実践の中にこれからのルルド巡礼の展望を試みている。

このようなルルド傷病者巡礼の推移をみると、この世に傷病者がいるかぎり、時代の変化に呼応しながらたゆまず「われわれ」世界の再構築と恩寵をめぐる再定義への試みがエネルギッシュに継承される基本構造をもった巡礼として概念化されるように思われる。サンチャゴ巡礼や四国遍路とは異なり、巡礼成立年度も近代以降のかなり後発の巡礼文化のひとつであるルルド巡礼に当初より組み込まれた遺伝子型にも思えるような性質である。

そして、本書最後の結論部分は、以上の考察を総括した部分と理論部分に関する本書のために書き下ろした部分からなる。とりわけ、関連理論の検討における、J・ハーバーマスとH・アーレントらの公共圏をめぐる議論を中心とする社会学的考察は、ルルドの傷病者巡礼にとっては重要な視座検証となるものであろう。しかし、本書の射程範囲からは逸脱するが、一見すると「公」に関するこの問題提起が日本特有の民俗宗教的な背景を色濃く持つ巡礼等にいかなるリアリティをもつであろうか、と自問せざるを得ない。ますます私事化しスピリチュアリティ化するかに見える巡礼動向が見られるからである。文字通り、逆説的にではあるが、公私の軸が次第にリアリティを持ちつつある、というのが近年の多くの先進国巡礼諸文化にみられる動向からの回答ではないだろうか。

さて、最後に、本書によれば、年代のずれはあるものの年間

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

およそ五〇〇万人前後のルルド来訪者のうち、巡礼者と分類されるのは約五分の一の一〇〇万人前後（さらにうち約十分の一が傷病者）に過ぎない現実がある。あとは「観光者」として一括分類されるというが、この状況が持つ意味合いや仔細な検証については本書の射程範囲に入っていない。しかし、傷病者やオスピタリテなどからはやや距離を置いた緩やかな一般巡礼者の問題があるであろう。たしかにルルド巡礼の基幹的部分からは外れるのであろうが、おそらくはこれら圧倒的残余のルルド訪問者の社会的空間領域に、四国遍路やサンチャゴ巡礼に見られる近年の諸動向にも接続される糸口が転がっているものと思われる。結論部分での「公」領域に十分には取り込まれない「私」的性質の強い形態の巡礼とも関係するものである。それはまた、伝統カトリック内部における類似の現象の問題とも関連するものではないだろうか。

加えて、ルルド巡礼は霊場修行型の巡礼だけに、巡礼特別列車などさまざまなアクセス様式による聖地への移動過程については本書の他箇所に比して十分な検証がなされたとは言いがたい。逆言するなら、道中修行型の四国遍路やサンチャゴ巡礼に特有の沿道における一時的な社会過程が持つ意味に比して、ルルド聖域空間の緻密な空間分化とそこでの祭儀が持つ意味がかえってクローズアップされるのである。移動型のスペクタクルと焦点固定型のスペクタクルとの違いもあるだろう。巡礼行為が持つ往還性の視点がややかすんだように思われるのは評者の背後仮説がなせる業であるかもしれない。

とはいえ、総じて本書は、ルルド巡礼を、霊場修行型の代表的巡礼文化であるルルド聖域を舞台に、いわば主役の傷病者と準主役のオスピタリテが中心となり（なかでも医師たち他が脇役となって）、神の恩寵圏としてのコミュニタス的共同社会を構築し続けるダイナミックな社会過程として見立てての事例分析を試みたものであり、そのクリティカルなパースペクティブが見事に生かされた近年の巡礼研究における珠玉の一冊であることは間違いない。

NII-Electronic Library Service